

近世末期における村落人口の變質過程

——尾張国中島郡起村における——

林 英 夫

一 はしがき 二 戸口の変動と階層分化 三 戸口変動の実相 四 むすび

一

近世末における農村構造とその解体過程の研究は、かなり進められてはいるものの、この問題の実証的な研究は、なお、乏しいように思われる。この小論はこうした意味で人口の変動面から検討しようとするものにすぎない。⁽¹⁾

まず、この小論の舞台となる尾張藩領、村高三百七十八石九斗余尾張国中島郡起村^{（現、愛知県尾西市起町）}（現、愛知県尾西市起町）の本稿に必要な程度の概要を述べておこう。

村は濃尾平野のはり中央、木曾川沿岸に位置し、畑二十八町余、田十四町余で畑作を主とする村である。まず、この村の性格を物語る三つの点について記しておかねばならぬ。第一に、起村は純農村ではなく、中仙道の脇往還美濃路の一宿で本陣、脇本陣各一軒、助郷二十ヶ村を持ち、加宿五ヶ村合せて千八百五十二石余で宿役を負担している宿場町である。⁽²⁾ 第二に、この村は近世の初頭から綿織物の生産が極めて高く、幕末期には高度の経営が行われていた事である。⁽³⁾ 第三には、商品経済の発展が深く滲透して早くから非農業人口を生みだし、濃尾平野のうちでは最も人口密

度の高い地帯である事である。⁽⁴⁾

以上の三点からこの村は、農民的商品生産の進展がかなり進んでいた村であつた事が理解される。

註(1) 本稿に引用する史料は註記せざる限り、立教大学史学研究室蔵、尾村庄屋兼脇本陣船庄屋、林氏所蔵文書によつてい

る。

(2) 林浅右衛門四番記録。なお、副題に起村とし起宿としなかつたのは、本稿の史料は藩政→地方役人→庄屋の支配系統にそつた地方史料に依拠し、幕政→道中奉行→本陣問屋（宿役人）の支配系統にそつた宿方史料によらなかつた結果である。又、通常宿場町は都市という概念で考へられているが、城下町・港町等を兼ねない純粹の宿場町の場合、領主の側からは基本的に農村としての経済構造で把握されている。多くの交通史論考が宿方史料に依拠する結果宿場町の生産力的基礎構造の見とおしを失ひ制度史的研究にとどまつているように思われる。

(3) 森徳一郎氏、尾西織物史。川浦康次氏、三八巾場の開市と発展、調査と資料六号。なお、この町は現在尾西織物（毛織）の生産の中心地帯である。

(4) 尾原信彦氏、徳川時代尾州平野の生産業と其変遷、歴史地理七〇ノ五によれば、寛文十二年の人口密度は美濃路の街道筋に最も高率であつた事が図示されている。氏はその理由を「起街道筋（美濃路）の人口密度の大なる事は、交通路に沿つた地に、商人人足外直接農業に従事しない」者のいた結果とされている。この事は後掲坪内庄次氏の諸稿にも指摘されている。

二

まず、人口の消長の跡を次の二つの表とグラフによつてながめ、つゞいて村落内部の階層分化に立入つて分析を試みておこう。

近世末期における村落人口の変質過程 (林英夫)

第1表

年	代	人	口	男	女	戸	数	一戸当り人数	典	拠
寛文	六	(一六六六)								諸事留書 ⁽¹⁾
寛文	二	(一六七二)	五七八	二八三	二九五	一〇二	八六	五、六七	中島郡村々寛帳 ⁽²⁾	
延宝	二	(一六七四)							諸事留書	
延宝	三	(一六七五)					九二		同	右
元禄	六	(一六九三)	七三一	三八八	三六三	一四七	四、九七		同	右
享保	五	(一七二〇)					一二		正徳二年舟方御用留 ⁽³⁾	
享保	八	(一七二三)	七四六	三七八	三六八	一七八	四、〇九		浅右衛門享保日記 ⁽⁴⁾	
享保	九	(一七三四)					一六三		国秘録 ⁽⁵⁾	
元文	二	(一七三七)							起村雜記録 ⁽⁶⁾	
安永	二	(一七七三)	八〇七						諸事留書	
寛政	四	(一七九三)	一〇三四	四九四	五四〇	二〇五	五、〇四		起村絵図 ⁽⁷⁾	
寛政	一三	(一八〇一)	九四一	四五七	四八四	二一八	四、三五		海道筋御分問一件 ⁽⁸⁾	
享和	一	(一八〇二)	九一三	四四四	四六九	二二三	四、〇九		同	右
文化	七	(一八一〇)	一〇二九	四五四	五七五	二二五	四、五七		起村御用留 ⁽⁹⁾	
文政	三	(一八二〇)	一〇一八	四八七	五三一	二三〇	四、四二		船方御用留 ⁽¹⁰⁾	

註 (1)(8) 加藤郡男氏藏(旧起宿本陣、問屋)。
(2)(6) 徳川林政史研究室蔵。
(3)(4)(7)(9)(10) 林文書。
(5) 名古屋図書館蔵。
なお、第1表は、いずれも典拠が区々で集計の方法が不統一と思われるため、厳密なものとして扱えないが、他に史料がないので、一応これによつて一般的判断の基礎資料としておきたい。

第2表 (宗門改帳による)

年	代	人	口	男	女	戸	数	高持	無高	戸	数中	無高ノ割	平	家族	均
文政	九	年	一〇七三	五三〇	五四三	一三四	一三七	九七	四一、四	四、五					
同	一〇	年	一〇六四	五二〇	五四四	一三四	一三七	九七	四一、四	四、五					
同	一	年	一〇六九	五二四	五四五	一三三	一三六	九七	四一、一	四、六					
同	二	年	一〇七五	五二三	五四三	一三三	一四二	九七	三九、〇	四、六					
天保	元	年	一〇八九	五五二	五二九	一三一	一四〇	九一	三九、四	四、七					
同	二	年	一一一四	五四〇	五七四	一三一	一四〇	九一	三九、四	四、七					
同	三	年	一一一四	五四四	五七〇	一三四	一三七	九七	四一、五	四、八					
同	四	年	一一二四	五四九	五七八	一三一	一三六	九五	四一、一	四、九					
同	五	年	一一一七	五四三	五七四	一四〇	一四四	九六	四〇、〇	四、七					
同	六	年	一一〇七	五三八	五六九	一二三	一二一	九二	四三、二	五、二					

近世末期における村落人口の変質過程 (林英夫)

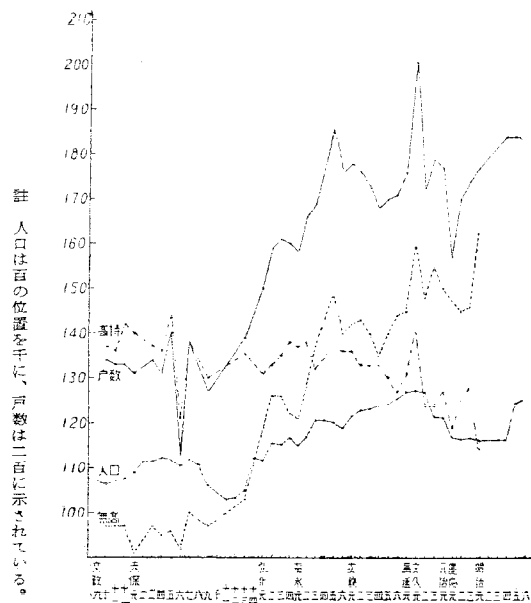
[illegible]

註 第2表は宗門改帳より作成。但、明治五年以降は町役場の戸籍帳による。なお、宗門帳・戸籍帳とも家族数の内容は全て近世末期における村落人口の変質過程（林英夫）

四九

近世末期における村落人口の変質過程 (林英夫)

第3表 戸口・高持・無高変化表



この三つの表にあらわれた特長的な推移のあとを見てみよう。

(1) 人口の上では天保二年から八年までの七年間と、天保十四年から始つて安政元年頃を中心として文久二年にいたる二十年間の二回にわたつて増加がみられる。その増加の時期の間、二回(天保十年頃と慶応頃)激しい減少を示している。

この人口の増減曲線は、戸数の増減曲線と無高百姓戸数の増減曲線との二つの曲線とはほぼ比例しているにもかかわらず、高持の増減曲線は、他の曲線と全く別のカー

ブを示している。

(2) それではこの増減曲線の示す村落構造の質的変化と、増減の意味をうかがつてみよう。文政九年から明治八年にいたる半世紀五十年のうち、減少を示した二つの谷間(天保八・九年と文久三年・明治四年)は、いうまでもなく凶慌である。第一の谷間(天保)の時期は、天保三年頃から始つた連続的な大饑饉で、尾張藩領でも「天保七丙申年

又、大いなる飢饉にして、下々重々の飢饉に及び、既に粮にすべき物なくて、糠粃を食せんと欲す⁽¹⁾という状態で城下名古屋においてさへも、七年冬から春迄、朝出勤の道で餓死人をみざる日はなく、天保九年から十年の春までに「無縁の死骸を埋る事千五百に越した」とあるように惨烈をきわめている。この起村においても(別表六・七表)を見ればわかるように、天保三年頃から、盗賊・欠落百姓・手錠・遠方留といった事態が激増していることによつてもこの村も激しい影響を受けた事が判然する。

天保六年四月には、起村に近接し、尾張藩領と境を接する天領、万寿新田では、農民が蜂起している。⁽³⁾

天保八年夏頃より、ようやく収穫をみるようになり、米価は下落したが、この第3表をみればわかるように、その影響は相当深く滲透していた。即ち、それにつゞく九年から十三年にかけての五年間、人口は減少し、無高百姓の急激な増加と零細農の激増という村落階層の質的な変化がこの時点を劃して進行している。

第二の谷間の時期(文久・明治三年)はどうであつたか。今、名古屋市史(政治篇二、二二一頁)と県史(二の四七八頁)にしたがつて表示すると

万延元年五月	洪水、領内十二万石欠損。
同年十一月	物価騰起。
文久二年六月	麻疹流行。
慶応元年四月	飢饉。物価騰起。
同 三年五月	疫病流行。

とある。天保年間の飢饉ほどではなかつたようであるが、天保の飢饉以来、無高百姓の急速な増加と第3表にみる近世末期における村落人口の変質過程(林英夫)

血縁関係のみを記し、奉公人は含まれていない。また、宗門帳上の年月はいずれも三月となつている。

ような一般的に高持百姓(中農層)の分細化が進んでいただけに(嘉永三年には無高層が高持層を凌駕して多くなっている)、農民の自活するための経済力は全般的に低下して生活力が衰へたために、僅かな天災でも、生活に与える影響は深まつて来ている。だから第一の天保の谷間は八年間余であつたが、第一のこの文久から明治にける谷間は十余年間で、新しい相対的安定条件を生みだすために第一の天保期以上の時日をかけなければならなかつた結果と考えられる。事実、後の六・七表によると、天保期以上に欠落・盗人の横行が多く、社会不安が深くなつていくことによつても理解されよう。それによつて明治元年には無高百姓が五九%をしめ、一・二表に示した二百余年間のうち一番無高層の占める比率が高かつた年であつた事を思えば理解されよう。

(3)つゞいて人口の増加時期をながめてみたい。普通には農村人口は衰退もしくは停滞しているものと考えられているが、この村の戸数の変化は相當に激しい。これは前述のようにこの村が宿場町であるとともに綿織業の町であつて、近郷周辺を含めて一円に發展した商品貨幣経済の波動に洗われて、転住しやすく土着性を失つた条件が成熟していた結果を示すものとみられる。⁽⁵⁾ 事実、弘化二年二六戸中一〇九戸は農業以外の職業か副業を持ち、専業農家とみらるゝ戸数は五三戸、二〇・二%、嘉永三年二七五戸中専業農家二〇・七%で、⁽⁶⁾ 同年通じて八〇%に近い戸数が商品生産に何らかの形で直接に關係をもつていたことからこれらの事情がわかる。

第三表をみると、天保四年・文久元年を中心とした二回の山、即ち増加時期がみられる。まず最初の天保期の山をみると人口の増加率は高持数・無高数・戸数の増減とほぼ比例している(三表のグラフの上で四凸が激しいようにみえるのは天保二・八・一一・一二年の史料が欠除している關係による)。しかも、文化から天保にける時期の平均家族員数は四表が示しているように、この時期は後のどの時期よりも多く、年代が下るにしたがつて減少の傾向を示している。これだけの史料では決定的な事はさげなければならないが、天保期を境として封建的生産關係の新しい展開を暗示しているように考えられる。

第4表 平均家族員数表

年	代	上ノ期間平均家族員数	人口状態ノ時期
文化七	↓天保七年	四、六九	増期
天保九	↓同 一三年	四、五五	減期(計算ハ二ケ年分平均)
弘化元	↓同 四年	四、四五	増期
嘉永元	↓安政元年	四、三六	サラ一増期
安政二	↓文久二年	四、五一	ソノマ、停滞期
文久三	↓明治四年	四、二九	減少期

第二の山(増加期)、弘化—文久年間の示す意味は第一の山の場合と少し異つてゐる。天保十年頃から、高持戸数はちぐさぐさのコースを辿りながらも全般的な傾向として減少の方向を示しているが、⁽⁷⁾ 無高層は急激な増加となつてゐる。だから、この時期は無高層の増加した分によつて膨脹したものであるといえる。こうした形をとつてあらわれてくる人口・戸数の膨脹は、いうまでもなく封建制維持の立場からは決して健康な姿ではなく、危機的様相をあらわしているものといえる。

また、以上の事から関連して、次のような特長がみられる。(一)戸口の上昇期には、平均家族員数が減少する。

(一) その上昇していた時期、安政元年から文久二年まで戸口・高持数・無高数の増減が停滞を示し、その停滞の期間の家族員数は増加している。

(4) 以上、表示された結果にしたがつて述べてきた階層分化は、どのような影響によつて起つたものであろうか。この村に発展した綿業・商品貨幣経済の面から、その全般的な見とおしを考えておきたい。但、その具体的な展開は小論の性質上別稿による事にしたい。

天災・物価騰起を通じて、商品貨幣経済の進展のもとに零細農を派発しつゝ農民層の分化をひき起しながら一部の小資本家的高持百姓の活動が積極的に開始される。この時期がこの村では、(一)天保八年から安政元年頃まで、(二)文久末年より明治七・八年に及ぶ二度にわたつて認められた。まず、第一の時期は、都市の間屋制支配から脱出しつつ、在郷商人が独力をもつて商品生産者を支配していく時期であつた。さらに安政元年から文久末年頃までの時期は零細農を産業構造の底辺として在郷商人が都市間屋資本から独立して、その支配網の骨組を強化した時期であつた。さらに文久末年から明治にかけて、在郷商人が寄生地主的側面を強化しながら傘下の生産者を完全に支配していた時期であつたと思われる。

次に農民層の分化にみらるゝ特長的な点にふれておきたい。通常、濃尾平野のうら特に尾張地方は先進地帯として考えられているが、この村にみらるゝ限りは、さき表の一と二によつてわかるように、水呑層の占める割合は、おゝむね、低位で、むしろ畿内地方の事例に似て、農民層分化の速度がおそい事である。農民層分化が、そのまゝ商品貨幣経済の滲透をあらわすものとするは、さらに立入つてこの村の性格を検討してかゝらねばならない。しかし、商品貨幣経済の蔓延と深さが直接生産者層を母体として押しあげられる場合には、その商品生産の深さ・広さに支えられ

て容易に余業収入の道を見出す事ができ、零細化を阻止するような生産条件が揃つていたのではなからうかと考えられる。

註 (1) 金鱗九十九塵(名古屋市史政治編二、六九二頁所収)。以下名古屋市史ハ市史ト略記スル。

(2) 太平談(市史政治編一、六九一頁所収)。

(3) 市史政治編一、一八六頁。

(註2) ニ同ジ。

(5) 坪内庄次氏、濃尾平野に於ける徳川時代の商品経済の滲透(愛知学芸大学地理学報告四)。

(6) 人別改帳。

(7) 第五表参照。本表ははゞ十年おきに抄録した階層構成表である。

第 5 表

年	代	戸	数	高	持	無	高	%
寛文二	延宝二	(一六七三)	一〇二	九二	一〇	〇九・八		
元 文二	年	(一七三七)	一六三	一四三	二〇	一二・三		
文 政一	〇 年	(一八二七)	二三四	一三七	九七	四一・四		
天 保七	年	(一八三六)	二三八	一三八	一〇〇	四二・〇		
弘 化三	年	(一八四六)	二六二	一三五	二六	四八・二		
安 政二	年	(一八五五)	二七六	一三三	四三	五・八		
慶 応二	年	(一八六六)	二七〇	一二五	一四五	五三・七		
明 治元	年	(一八六八)	二七七	一一三	一六四	五九・二		

註 なお濃尾平野の人口を論じたものに、坪内正次氏の「濃尾平野に於ける徳川時代の人口増減」(愛知学芸大学地理学報告二)、伊豆川・浅井氏の「美濃岡における人口の分布と増減」(人口問題六ノ二)、加藤武夫氏の「藩政時代における尾張の人口の分布と変動」(地理学評論二六ノ五)の諸論稿が既に発表されている。

本稿中しばしば述べた無高について、尾張藩士・尾島幸左衛門の「地方品目解」に「水吞百姓、是は無高の百姓申候」とある。

三

前章にうかゞった戸口の変動と階層分化のうち、階層分化の問題は別稿にゆずることにして、戸口の変動だけに問題をしばつて実相を史料の上からながめてみよう。

まず、さいわいに「男女増減帳」、「変化之訳書上帳」と記した美濃半折の長帳が残っているもので、これを整理したものを表に示してみよう(第6表)。この帳は宗門改帳と共に毎年三月地方役所に届出て前年との「変化之訳」を書記しているので、全く宗門帳の記載と別合している。

第6表の表をさらに別の視点からみるために第七表犯罪件数表(表現が適當でないかも知れないが、適当な語句が考え浮ばないので)を併載した。これは村方願達留と表記した史料で、各一年毎に村から差出した願書・達書を集成したものが、文化七年以来途中欠本もあるが、残存しているのでそれから作成した表である。この史料と宗門帳とは一致していない。これは欠私となつても直ちに帳除けしていない者がいたりする関係である。

いま、この六・七の表が示す一般的な変化の実相をながめてみることにしたい。

(1)人口変動の一番重要な要因は、出生数と死亡数との差異、自然現象である事がわかる。例示するならば、文政

九年以来二十七年間中、最大の人口減少期は文久三年で、死亡率百人につき五・三五人、出生率二・一四人となつているときである。つまり、死亡率の高いときに出生率低く、逆に死亡率の低いときには出生率高位という現象が示されている。

すなわち、六表中、増減実数の減となつているのは、二十七年間中十二回である。そのうち、弘化三年と嘉永三年の減少主因は「故郷へ立帰」であり、安政五年と慶応二年の減少主因は「身分一札」の結果、宗門帳からはぶかれただけで実際には減少していなかったから、この四回を除いた八回の全ての減少主因が自然減少であることによつても理解できる。

(2)二表にも示されているように嘉永二年を劃してそれ以後、総人口中、男子の数が女子より多くなつて、そのまゝ幕末にいたつている。表示されている限りでは男子出生率が増加したことになるが(六表)、嘉永三年からは全戸数中、無高層が高持層を凌駕した時期であつたことと考へ合せると、生活窮迫のため人口制限に際し、女子を犠牲者とした結果であらうと思われる。

(3)婚姻・離婚ともに当然予想されることであるが、不況時(人口減少期)に少い。

(4)六表によると掛り人(厄介人)の移動が相対に激しく、ことにこの村から他村へ出ていく者が多く(表中、掛り人として村外へ出た総人数は七十六人、村に來た者五十七人)、また、天保末年頃から出入の頻度が激化する傾を示している。この天保末年は、前述のグラフ(三表)と対照してみると無高層が急速な増加を示した時点であつたのであるから、これも農民層の一般的な窮乏の現象面を示していることがわかる。

(5)次に七表(犯罪件数)に示された現象の特長的な点を述べておこう。盗難件数・欠私人数(欠落)の頻度は、ほ

第 6 表 変 化 之

訳 書 上 帳

近世末期における村落人口の変質過程 (林英夫)

種 別		人 口	出 生		内 訳		増		養 育		離 縁		(来) 掛		そ の 他		合 計		総 計	出 生 率	死 亡 数	
			男	女	嫁	娶	子	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女				
			口	数	男	女	嫁	娶	子	女	男	女	男	女	男	女	男	女				
文政9年	1073	37	20	17	7	—	2	—	1	—	—	—	—	—	4	2	26	27	53	3.45	24	
10年	1064	26	14	12	3	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	15	15	30	2.44	32	
11年	1069	37	21	16	7	1	1	—	—	4	1	—	—	—	—	—	26	24	50	3.83	35	
12年	1075	23	7	16	4	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	7	16	23	2.12	12	
天保3年	1114	26	13	13	9	—	—	—	1	1	2	—	—	—	—	—	14	25	39	2.35	24	
4年	1124	36	16	20	16	—	2	—	3	2	—	—	—	—	—	—	20	40	60	3.20	26	
6年	1107	24	16	8	4	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	17	12	29	2.16	27	
7年	1119	36	22	14	7	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	22	22	44	3.30	24	
9年	1063	31	14	17	6	—	—	—	1	2	1	—	—	—	—	—	16	25	41	2.90	70	
13年	1049	47	24	23	1	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	26	24	50	4.07	28	
弘化元年	1116	47	27	20	9	—	1	—	1	1	3	3	2	32	32	64	1	21	50	—	—	
2年	1157	63	37	26	7	—	—	—	1	1	—	—	—	—	—	—	1	39	34	73	6.53	15
3年	1154	31	23	8	9	—	3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	26	18	44	2.77	26	
4年	1167	39	19	20	6	—	—	—	1	3	—	—	—	—	—	—	22	27	49	3.42	20	
5年	1149	32	18	14	1	1	—	—	1	1	1	1	—	—	—	—	21	17	38	2.78	47	
嘉永2年	1169	38	23	15	4	—	1	—	—	2	3	—	—	—	—	—	26	22	48	3.24	11	
5年	1203	37	21	16	6	—	2	—	1	2	2	—	—	—	—	—	25	25	50	3.07	29	
6年	1188	24	12	12	5	—	—	—	2	3	2	—	—	—	—	—	19	22	41	2.02	40	
安政2年	1230	45	24	21	5	—	—	—	1	1	—	—	—	—	—	—	1	25	29	54	3.65	27
3年	1231	29	14	14	9	1	2	—	—	2	—	—	—	—	—	—	19	23	42	2.36	26	
4年	1241	43	18	25	9	—	2	—	—	2	3	4	2	26	39	65	3	46	31	—	—	
5年	1240	32	15	17	13	—	1	—	—	—	1	—	—	—	—	—	16	31	47	2.74	24	
万延元年	1269	36	21	15	6	—	2	—	—	2	—	1	—	—	—	—	26	21	47	3.83	22	
文久3年	1214	26	13	13	4	—	1	—	1	—	1	1	—	—	—	—	17	19	36	2.14	65	
慶応2年	1164	24	9	15	5	—	—	—	—	2	2	—	—	—	—	—	11	22	33	2.06	20	
3年	1171	33	20	13	3	1	—	—	1	—	—	1	—	—	—	—	23	16	39	2.81	25	
明治元年	1162	21	14	7	1	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	15	8	23	1.80	26	

註 ※ 印数不都合なれどもまゝ。() 内はその他の意味の内容。身分一札の人数

少																			
内 訳	出 生	出 産	養 子	養 女	離 縁	(出) 掛 り 人	欠 損	音 不 通 所	出 稼 ノ 不 通	そ の 他	合 計	総 計	死 亡	増 減 実 数					
															男	女	男	女	男
男	女	歳	産	子	女	男	女	男	女	男	女	男	女	計	数				
13	11	10	—	2	—	1	3	1	—	—	—	18	23	41	2.23	+12			
13	19	3	—	—	—	—	1	3	—	—	—	14	25	39	3.00	-9			
17	18	3	—	1	—	—	4	1	—	—	—	22	23	45	3.27	+5			
7	5	4	—	—	—	—	1	—	—	—	—	8	9	17	1.11	+6			
7	17	8	—	—	1	—	1	—	—	—	—	3	2	10	29	59	2.15	0	
13	13	17	—	1	—	1	1	1	—	—	—	15	32	47	2.31	+13			
15	12	4	—	—	2	—	2	—	4	1	—	22	17	39	2.43	-10			
6	18	7	—	—	—	—	1	—	—	—	—	6	26	32	2.15	+12			
37	33	2	—	—	—	—	2	9	3	—	—	46	40	86	6.59	-16			
13	15	3	—	—	—	—	3	—	—	—	—	16	18	34	2.76	+16			
34	16	9	—	2	—	2	1	2	—	—	—	39	29	68	4.48	-4			
9	6	11	—	—	—	—	3	—	2	—	—	10	22	32	1.29	+41			
8	13	10	2	2	—	2	1	—	1	—	2	4	2	20	27	47	2.25	-3	
8	12	5	—	—	—	—	2	1	1	1	1	4	15	21	36	1.71	+13		
26	21	2	2	—	—	—	1	1	—	1	1	1	31	26	57	4.09	-19		
4	7	4	—	1	—	—	1	2	6	—	—	1	10	18	28	0.94	+20		
11	18	7	—	3	—	—	5	—	2	—	—	4	2	25	29	54	2.41	-4	
17	23	6	2	4	1	—	1	1	—	—	—	—	25	31	56	3.34	-1		
14	16	7	—	1	—	—	2	1	—	—	—	—	16	25	41	2.19	+13		
11	15	5	—	1	—	—	3	—	1	—	—	4	21	20	41	2.11	+1		
19	12	4	—	1	—	—	8	3	1	1	—	5	1	34	21	55	2.49	+10	
12	12	11	—	1	—	—	1	2	—	—	—	1	5	3	16	32	48	1.93	-1
13	9	2	—	2	—	—	3	1	1	—	—	—	19	12	31	1.73	+16		
36	30	4	1	1	—	1	2	—	6	1	1	—	43	43	86	5.35	-50		
11	9	5	—	—	—	—	1	—	1	—	—	5	6	18	22	40	1.71	-7	
14	11	6	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	15	17	32	2.13	+7		
14	12	1	—	—	—	—	—	—	2	—	—	2	1	18	14	32	2.23	-9	

の多いのは一戸が宗門帳よりのけられたため。

近世末期における村落人口の変質過程 (林英夫)

第 7 表 犯 罪 件 数 表

年次	被放火ノ家	欠所ノ者	他出留ノ者	押込ノ者	追放ノ者	遠方留ノ者	欠私ノ者	被盜難ノ家	手錠ノ者	年次	被放火ノ家	欠所ノ者	他出留ノ者	押込ノ者	追放ノ者	遠方留ノ者	欠私ノ者	被盜難ノ家	手錠ノ者
文化7	—	—	—	—	—	1	1	2	—	嘉永元	—	—	—	—	—	—	—	—	—
文政5	—	—	—	—	2	—	—	—	—	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—
8	—	—	—	—	—	5	—	—	—	3	—	—	—	—	—	—	—	—	—
9	—	—	—	—	—	—	—	—	—	4	—	—	—	—	—	—	—	—	—
11	—	—	—	—	—	—	—	—	—	5	—	—	—	—	—	—	—	—	—
12	—	—	—	—	—	1	1	—	—	6	—	—	—	—	—	—	—	—	—
天保元	—	—	—	—	—	—	—	—	—	安政元	—	—	—	—	—	—	—	—	—
2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—
3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3	—	—	—	—	—	—	—	—	—
4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	4	—	—	—	—	—	—	—	—	—
5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	5	—	—	—	—	—	—	—	—	—
6	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
※ 7	—	—	—	—	—	—	—	—	—	万延元	—	—	—	—	—	—	—	—	—
8	—	—	—	—	—	—	—	—	—	文久元	—	—	—	—	—	—	—	—	—
10	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—
11	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3	—	—	—	—	—	—	—	—	—
12	—	—	—	—	—	—	—	—	—	元治元	—	—	—	—	—	—	—	—	—
13	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
※ 弘化元	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

註 ※印は資料に残欠があり完全ではない。遠方留の者が多いのは座屋五人組などが連坐したためである。

近世末期における村落人口の変質過程 (林英夫)

と平行して天保末年頃から増加し、前述のごとく(三章4)、無高層の急増時点と一致している。ことに、安政末年以後はその頻度が一段と激しさを加えているが、この時期は高持層が急減し総人口も減退し、無高層が飛躍的に増加した時期であつた。

(6) 欠私者人数が、六表と七表とを比較すると六表では(宗門帳より除外された者)三十二人であるが、七表では(欠私した者)六十人で、合わないのは統計年間の相異と、帳除されないままに村に立歸つてゐるためである。この七表の六十人中、三ヶ月以内に歸村してゐない者四十二人、三ヶ月以内に歸村した者十八人、不明七人で、約七割が無籍者となつて転落してゐたことになる。

(7) 被盜難件数が多いのは、この村が宿場町で他國者の往来が多かつたことにもよるが、とにかく幕末における人心不安の一端のあらわれを示している。最も件数の多かつた万延元年は年間十五件で、当年戸数二七六戸であるから実に、一八・四戸に一戸の割で盜難に會つてゐることになる。こうした数がどの程度のものであるか、他に比較すべき材料をみないのでわからないが、相当に多い盜難件数であるように思われる。

四

以上、幕末における一村落の人口の変動過程をながめてきたが、天災・収奪の強化等、権力機構のしわよせの現象としてのみこれを扱うのはさげなればならない。村の人口変動を生みだすところの生産関係の構造的把握、村における土地所有関係の展開、ことに綿業の成立過程、本稿に述べなかつた近世初頭以来の歴史等を十分に検討しなければならぬので、いま、こゝで結論を述べることはさけて別稿にゆづることにしたいが、大よそ次のような事は言

えよう。

この村における封建的生産関係の解体は、天保期・万延期という二つの波動期を経て進展している。また、この二回の波動期を経て新しい生産関係の成長がみられたということであるが、この新しい生産関係がどのようにして展開してきたかは、なお、実証すべき史料的な裏づけと共に後稿にゆずる事にしたい。(二八、二九、三〇稿、三〇、五、一部改稿)

本稿は「尾張における綿織物業の発展過程の研究」の一章としてまとめたものであることをおことわりしておきたい。なお、本稿統計の一部は立教大学経済学部学生太田朗雄君によるところが多い。記して感謝の意を表したい。